

演題番号：

演題名：顕著な頸部腫瘍がみとめられた牛白血病の一例

発表者氏名：中澤孝文 山本香織 宗田龍 石川喜代子

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1. はじめに：牛白血病は、発症年齢、臨床症状および病因等によって「地方病性」「子牛型」「胸腺型」「皮膚型」の4つの病型に分類される。このうち、と畜場で多くみられるものは牛白血病ウイルス（bovine leukemia virus：以下BLV）感染に関連した地方病性牛白血病である。今回、生前の検査においてBLV抗体陰性であったが、と畜検査において頸部腫瘍をみとめ、精密検査において牛白血病と診断された一例について報告する。
2. 材料と方法：平成29年11月8日に病畜としてと畜された牛（ホルスタイン種、牝、24ヵ月齢）の全身諸臓器、リンパ節および腫瘍部を検体とした。材料は10%中性緩衝ホルマリン溶液で固定後、定法に従いパラフィン包埋切片を作製し、ヘマトキシリン・エオジン染色を実施した。
3. 成績：
 - (1) 生体検査所見：搬入時生体検査において、軽度消瘦、左横臥、右耳下部皮下に腫瘍が触知された。
 - (2) 肉眼所見：頸部皮下に境界不明瞭で大型の腫瘍をみとめた。腫瘍断面は黄白色から赤色で髄様であった。その他、頭頸部リンパ節の腫大が確認された。肝臓および腎臓では白色斑が散在し、脾臓に腫大はみられなかった。
 - (3) 組織所見：腫瘍では単核細胞のび漫性増殖がみとめられた。増殖している細胞は、細胞質に乏しく赤血球の2~3倍程度の大きさの核を有し、大型リンパ球様の形態を有していた。一部にリンパ節様の構造が残存しており腫瘍細胞に圧排されているような像が確認された。また、腫瘍中心部は広範に壊死し、腫瘍細胞の間質には弱好酸性の膠原線維の増殖がみとめられた。

肝臓および腎臓では、上記と同様の形態を有する腫瘍細胞の浸潤がみとめられ、一部は腫瘍に置換されていた。

下顎リンパ節、縦隔リンパ節および肝門部リンパ節にて腫瘍化がみとめられた。その他のリンパ節および脾臓には著変はみとめられなかった。
 - (4) 抗体検査：BLV抗体検査陰性（11月2日実施）
 - (5) 行政処分：全部廃棄（診断名：牛白血病）
4. 結論：頸部腫瘍がみとめられた場合、胸腺腫や胸腺癌等との鑑別が必要である。本例は組織学的特徴から牛白血病と診断した。また、頸部に大型の腫瘍がみとめられたこと、BLV抗体陰性であることおよび好発月齢に該当することから胸腺型牛白血病と考えられた。BLVは全国の感染率平均が乳牛で約40%、肉用牛で約28%と高い結果が報告されている。当所においても、過去5年間で牛白血病と診断され抗体検査が実施された牛のうち、BLV抗体陰性であったものは本例のみであり、地方病性が否定されることは稀である。今後とも症例を蓄積し、迅速な診断の一助としたい。